

子どもの権利条約

「LGBTの子どもの権利」

「批准20年をむかえて」

はじめに

二十数年は「LGBT」として激動の時代だったと言えるかもしれません。2004年に性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律が施行されました。NHKの番組では、2006年頃から性同一性障害者を、2008年からは「エイズ」にアンについても取扱い、生身のLGBT当事者の声を届ける番組が組まれました。文部科学省は2010年に性同一性障害と診断された児童に学校生活上の性別変更を認めたことで「十分配慮した対応を」と全国に通知しました。また、2013年に行われた6千人の教員を対象にした意識調査では、6割以上の教員が「LGBTや性についての研修があれば受けたい」と回答しており、問題意識

は高まっています。

子どもの権利とLGBTのセクシュアリティ

世の中が変わってきていても、学校という狭い世界で生きていくLGBTの子どものためのしんどさはなくなっているとはいえません。例えば、各種メディアは同性愛や異性愛を保持し愛いもの／いけないうものとして描いているので、自分自身を受け入れられないこと、自分がLGBTかもしれないと思っても、それを肯定する情報も機会もありません。あるいは、男の子だけだとスカートが好きと書くと「中八九いじめられます。好きなもの、好きな服、したいこと、言いたいこと、非難やいじめを恐れて素直に表現することができません。また、多くの学校で男女別の制

服があるので、自分の望む性別の服を着ることができません。授業や慣習(フオークダンスが男女ペアとか、バレンタインなどイベント)が「異性を好きになる前提」で話が進むので疎外感を感じます。また、同性の恋人がいたとしても誰かに恋愛話をしたり、相談することが困難です。そして、同性に告白したら次の日からいじめや嫌がらせがはじまったり、LGBTについての書籍や雑誌などが家族に見つかってしまったり、予期できない危険もあります。子どもたちが育かされることなく素のままでも生きていくこと、差別や侮辱から守られること、セクシュアリティに関係なく学校で教育を受けられること、これらは権利です。LGBTの問題が人権問題であることもっと社会が認識する必要があります。

児童の権利に関する条約(以下「条約」)

1 締約国は、その管轄の下にある児童に対し、児童又はその父母若しくは法定保護者の人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国籍、種族的若しくは社会的出身、財産、心身障害、出生又は他の地位にかかわらず、いかなる差別もなしにこの条約に定める権利を尊重し、及び確保する。

2 締約国は、児童がその父母、法定保護者又は家族の構成員の地位、活動、表明した意見又は信念によるあらゆる形態の差別又は処罰から保護されることを確保するためのすべての適当な措置をとる。

*1 「LGBT」は、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの略文字をとった略称。

*2 「児童生徒が抱える問題」に対するこの教育相談の趣意について(要約)
<http://uenath.sugino.com/contents1.html>

かみゆきやアウター

教育現場の意識が変わってきていると思います。人権問題の課題として位置づける学校が増えたり、性教育に取り組んできた教師や養護教諭も、LGBTを含んだ視点での授業を試みる人が増えてきました。

また、LGBTもカムアウトする人が増えてきました。LGBTの若者たちも自分で、インターネットで調べたり、仲間と繋がり、親や友だちに早い段階でカムアウトする人が増えています。LGBTについての適切な知識をもっている人も増え、カムアウトが肯定的に受け止められる確率も高くなっています。性同一性障害についてはかなり認知度が高くなり、就職や就学の場面で差別されるのが減りました。特に今の子どもたちの親世代の偏見はマシで、偏みの性別で通学することや性別再適合手術などにも協力的な親が増えています。

2011年にLGBTについて学ぶためのDVD教材が制作され、実際に小学校の授業で使用されていますが、以前ならこうした授業を学校ですると保護者からクレームが来たでしょうが、今は「やってくれてよかった」という声も多々届いているようです。

かみゆきやアウターなさいと、今後の課題

社会での認知度があり、カムアウトがしやすくなったとは言え、やはり家族や会社でのカムアウトを戸惑う人は依然多くいます。自分の性に気づきながらも結婚や出産の選択に悩まなければならない状況です。

医療や福祉の現場では、いまだにLGBTが想定されているとは言えません。同性パートナーが事故や病気が家に来る場合や、地域の人間関係のなかで暮らす場合、LGBTであることでサポートが受けにくくなる

ことは想像に難くありません。

また、家族の形が多様になりつつある日本でも、まだまだLGBTが子どもをもつことは想定されていません。ライフスタイルも様々で、生殖医療が発達した現代で、古典的な家族だけが神聖視されることは、誰にとっても悲しいことです。海外ドラマではLGBTの存在が当たり前になっているように、そうしたカルチャーの部分で人々が多様性を知り、結果的に日本のLGBTやその他のマイノリティの状況にプラスに働けばと期待しています。

最後に、LGBTが顕在化するのと同時にステレオタイプもつくられていくので、子どもたちには性は多様であること、「コミュニティ」などで実際に様々なおとなの人生に触れられるようにすること、自分で性別や恋愛形式を検討できるような十分な情報提供と相談サポートの充実が必要です。LGBT「コミュニティ」や教育機関とのさらなる連携を検討していきたいです。

(塩安九十九)



shiga-cvb
 G-FRONT関西所屬、新設Cチーム企画主宰。行政にLGBTの人権問題を提起したり、学校へ講師に行ったり、教材を制作したり、性別違和感をもつ人々へのピアサポートなども、共言「トランスがわかりません」は、恋愛のフツツがわかりません」

*3 「子どもの、人生を変える、先生の言葉があります。教師5、679人のLGBT意識調査レポート」
<http://health.sugino.com/>

*4 「いろんな性別〜LGBTに聞いてみよう〜」(2011年制作) DVDご希望の方は左記まで必要枚数と住所をご連絡ください。
lightsoug@gmail.com